

支える手は離さない

台風19号 宮城・丸森

本県の看護師 避難所で奮闘

各地に深い爪痕を残した台風19号の上陸から間もなく1カ月。被害の大きかった宮城県丸森町では被災者の避難所生活が今も続く。先が見通せない不安を少しでも解消しようと、現地では本県の災害支援ナースが活動している。9日には新たに看護師2人が避難所での活動を始め、「心に寄り添い、必要な支援をしたい」と語った。
(小田信博)

9日から活動を始めたのは村越恵子さん(46)とみゆき会病院Ⅱと榎本翔太さん(32)と日本海総合病院Ⅱの2人。災害支援ナースは被災者の健康維持や医療・看護を提供する役割を担い、山形県看護協会では現在、78人が登録。先月中旬から1班2人体制で、3泊4日ずつ交代しながら支援に当たっている。

町によると、6日午前9時現在、避難所5カ所に計約200人が身を寄せている。2人の活動場所となる丸森小体育館では約50人上る。館内は段ボールで仕切られたスペースが、居住空間として確保されている。ステージ上ではスタッフらが寝泊まりする。

この日、村越さんと榎本さんは避難者との顔合わせを行い、体育館周辺の設備を確認するなど、本格的な活動に向けた準備に当たった。今後は夜間の見回りや介助が必要な人のサポートが主な仕事になるといふ。

2人とも被災地での活動は初めてで、表情には緊張感が漂う。榎本さんは「被災者の気持ちに配慮しながらどう関わるべきか。不安はあるが、寄り添っていきたい」、村越さんは「生活スタイルに合わせて何を必要としているのか考え、支えていく」と気を引き締めた。

避難所で生活する女性(77)は「遠くから来てくれたことに感謝している。看護師がいると心強い」と話し、一あつという間の1カ月だった。避難生活には慣れてきたが、早く以前の普通の生活に戻りたい」と切実に語った。



飲料水設備を確認する村越恵子さん(左)と榎本翔太さん(右) 9日午後4時6分、宮城県丸森町着内丸森小(撮影・関賢一郎)

熊本地震や西日本豪雨など、全国の被災地で活動する県自主防災アドバイザーの千川原公彦さん(48)と山形市は、台風19号の直撃を受けた3日後の先月15日から丸森町に入り、被災者支援に奔走している。復旧がなかなか進まない状況について、慢性的な人手不足を課題に挙げ、「まだまた支援が必要」と訴える。

現地で活動 県アドバイザー千川原さん 慢性的な人手不足 訴え



ボランティアセンターの運営や被災者の支援活動に奔走する千川原公彦さん 二丸森町・同センター

た家財の運び出しが続く。現地の地形と山形市内を流れる須川などを比較しながら、丸森町と似たような場所は山形にもある。同じ被害が起きてもおかしくなかった」と警鐘を鳴らした。

現在は平日で200人、週末で500人のボランティアが集まるが、「毎日、千人くらいは来てほしい」のが現状だ。建築材などの災害ごみは、処理が追いつかず、いたる所で積み上がったまま。そんな中、今月2〜4日の3連休には計約2400人のボランティアが集まり、そのうち300人近くが本県からの応援だった。「丸森の復旧は山形に支えられている」といふ。今回の災害における教訓として、スコップなどの資材倉庫の必要性を強調する。宮城県内には災害時にすぐ使える資材の倉庫が3カ所に設置され、初期対応で有効に活用された。一方、本県にはまた資材倉庫が常設されていない。資材がそろっていれば、ボランティア活動も円滑にスタートでき、「内陸と庄内に1カ所ずつあるといい。他県の被災地に貸し出すこともできると提言した。



持ち込まれた災害ごみを分別する作業員。まだまだ処理は進んでいない=9日午前9時52分、丸森町役場付近(撮影・関賢一郎)